

時々、薬草の採集につれていってもらったこともありました。草が薬になるなんてと、それも新しい発見でした。おまけに採集した草を、下谷広小路の薬種屋に持って行くと、買ってくれました。これも眞次には魅力でした。もっともそんなこと父には内緒でした。

ある日、眞次は奥野先生の庭の手入れをしていました。奥野塾は、塾生の数から割り出されたのか、進度によるのか、早番と遅番にわかれていました。

眞次は遅番です。早番が終るまで、何となく庭の草取りをして待っていました。座敷から早番の塾生たちが素読をしている声が出て来ました。その声を聞きながら、雑草をむしっていて、はっと手を止めました。

土がすこし盛り上がっており、浮き上がった土くれがほろりとくずれ、そのすき間からうすみどりの芽が出かかっています。みどり色になっているのは、ほんの先の方で、殆んど白いままでした。多分陽が当たると、色がついてくるのでしよう。

ああ。眞次は思い出しました。これはいつだったか、奥野先生が日光の中禅寺湖のほとりで、採集して来た座禅草ではありませんか。

先生ははじめのうちは、「まだか、まだか。まだ芽を出

さぬか」

と、指先きでほじくったりしていました。

「中々活着しませんね、先生。江戸の土に合わないのではないでしょうか」

一緒に採集に行った塾生がいました。

「やはり、野に置き、座禅草か」

先生はあきらめて、その後、座禅草は忘れられていたのです。それが芽吹いていました。

「先生」

眞次は立ち上がって、でも思わず口を押さえました。講義中邪魔をしてはいけないと、気づいたからです。

それ以来、眞次は、早番の日も早く来て、座禅草の観察をしました。

芽が伸びて、葉がひらき、その葉に守られるよう花芽が出て来ました。おかげですこし植物に興味が出て来ました。「本草学か。うーん、いつか小石川薬草園で見た薬草の研究もおもしろいかも。朝鮮人参が移植できたら、助かる病人もたくさんいるだろうなあ」

眞次は方向を見つけた気になったのですが……。

ある日、奥野先生が庭にいる眞次に、縁側から声をかけました。

「おい、眞次、ちょっと来い。これを見なさい。オランダ